

コインにみるアルジェリアの歴史と政治

渡邊 祥子

●支配者が変われば、貨幣も変わる

マグリブの歴史において、貨幣は、王たちの臣民に対する支配の道具になっただけでなく、時に抵抗の手段にもなった。例えば、モロッコ南部のスイジルマーサで発掘されたミドラル朝（七五〇〜九七六年）時代の貨幣。イスラーム初期の分派であるハワーリジュ派（スフリ派）を受け入れたベルベル人（北アフリカの先住民）の王朝であるミドラル朝は、サハラ以南のガーナ王国やイベリア半島、東アラブ世界との交易で栄えたが、一〇世紀になるとファアティマ朝（九〇九〜一一七一年）の領土拡大によって圧迫を受けた。スイジルマーサは征服され、ミドラル朝君主の支配は名目的となった。王朝の危機のなかで九四二年に即位したムハンマド・イ

ブン・ファトフは、ファアティマ朝の支配から王朝を救うべく、奇策を練った。まず、イベリア半島の後ウマイヤ朝との同盟強化のため、スンナ派に改宗した（対するファアティマ朝はシーア派の一派イスマール派を奉じていた）。さらに、ファアティマ朝の

カリフ位に対抗して、みずからカリフを宣言し、「シャール・リッラー」の称号を名乗った。九四五年に鑄造されたこの地方の貨幣は、これまでファアティマ朝カリフの名を記した場所に「シャール・リッラー」の名を刻んでいる。抵抗に業を煮やしたファアティマ朝は、九五八年に討伐軍を送った。イブン・ファトフは捕らえられ、ファアティマ朝の当時の首都マンスーリーヤ（現チュニジア）に連行され、檻に入れられたまま街中を引き回される辱めを受

けた。王朝はその後二代で滅亡した¹⁾。貨幣が抵抗の道具となる事例を、後世のアルジェリアにもみることが出来る。一八三〇年のアルジェ陥落以降、アルジェリアはフランス軍による侵略を受けるが、征服戦争に対する最大の抵抗指導者は、西部マスカラ出身のアブドゥルカーデル（一八〇七〜一八三三年）であろう。フランスのピエジョー將軍との間にタフナ協定（二八三七年）を結び、アルジェリア西部と中部の大半の主権者とされた若き指導者は、オスマン政庁の敗走後、分裂状態にあったアルジェリア西部の政治的統合を試みた。アブドゥルカーデルは、彼の権威に服従しない諸勢力と戦い、平定した地域に彼の代理人である知事（ハリーファ）を置いた。裁判官（カーディー）による

イスラーム法廷を導入し、司法制度の統一が図られたほか、フランス軍に対するジハードを支える武器工場も建設された。こうした努力と並行して、貨幣鑄造所が作られ、「ムハンマディーヤ」「ニスファイヤ」という独自の貨幣が鑄造された（写真1）。アブドゥルカーデルの運動が「国家」建設のそれであったと形容されるのは、彼が敷設しようとしたインフラの中央集権的性格に基づく。

抵抗も空しく、一九世紀末にアルジェリア北部はフランスの海外県として併合され、植民地ではなく国内扱いとされた。ヨーロッパ系入植者が農場を経営し、ヨーロッパ風の新市街が建設され、市議会が設置された。この時代のアルジェリアにおいては、フランス国内と同じ貨幣が流通した。フランス共和国の象徴である女性マリアンヌを刻んだ、フラン通貨である。

●貨幣からみえるナシヨナル・シンボル

八年間の激しい戦争を経て、一九六二年に晴れて独立したアルジェリアでは、アラビア文字やシンボルを用いた貨幣デザインが多

写真1 アブドゥルカーディルの貨幣
「ムハンマディーヤ」



左「神の宗教はイスラーム」右「タグデムト〔アルジェリア南西部〕にて1252年〔西暦1836/7年〕
鑄造」
(出所) Mounir Bouchenaki, *La monnaie de l'Emir Abd-el-Kader* (Algiers: SNED, 1976), 34, Planchell.

く採用されている。加えて、地域を代表する動物（馬、フェネックギツネ、ラクダ、バッファロー、象、鷹、ライオン、ガゼル）の図案も多い。

貨幣に用いられているモチーフは、しばしば国家と国民統合を象徴するシンボルである。例えば、アルジェリア独立を記念するコインは、一〇周年（五ディーナール硬貨、麦穂と石油プラント）、二〇周年（一ディーナール硬貨、アラビア語で「私の祖国よ、おまえのためよ）、二五周年（一ディーナール硬貨、一九八二年にアルジェに建設された独立記念塔）、四〇周年（二〇〇ディーナール硬貨、馬とヤシの木）、五〇周年（二〇〇ディーナール硬貨、男女

の横顔、三日月と星、独立記念塔と列車とコンピユータ）と、構図を変化させながら発行され続けている。一九五四年のアルジェリア独立戦争開始を記念するコインも、二〇周年（五ディーナール硬貨、戦う兵士と「十一月一日」独立戦争開始の日）、三〇周年（五ディーナール硬貨、歯車と麦穂、三日月と星を包み込む手）、五〇周年（五〇ディーナール硬貨、戦う男女の兵士と三日月と星のシンボル、裏面にアラビア語で「平和、科学、労働」）のものが存在している。この他に、アルジェリア・ナショナリズム運動の転換点となった一九四五年のセティフ・ゲルマ事件⁽²⁾から三〇年を記念する五〇ディーナール硬貨がある。このように、対仏抵抗運動に関するコインが多いのも、長い植民地支配からの解放の歴史がナショナル・アイデンティティの中核をなす、この国の特徴であろう。

独立アルジェリアの国づくりを象徴するシンボルも数多い。四カ年計画（第一次一九七〇〜七三、第二次一九七四〜七七）、五カ年計画（第一次一九八〇〜八五年、第二次一九八五〜八九年）を記念するコインは、どれも歯車と麦穂

のなかに数字で年代を配したデザインである。これらは、アルジェリアが「アラブ社会主義」イデオロギーを忠実に実行していた時代の遺産である。一九七二年発行の一ディーナール硬貨は、トラクターを中央に麦穂と握手を交わす二つの手を周囲に刻んでいるが、これはブーメディエン大統領（在職一九六五〜七八年）が推進した「農業革命」を示している（写真2）。この政策により、大土地所有者の農地が国有化され、協同組合による農業生産が促進された。

社会主義政策の行き詰まりの結果、アルジェリアは一九八〇年代末に自由主義経済に転換する。一九八八年の大衆蜂起をきっかけとした民主化の実験、一九九〇年代の凄惨な内戦と、激動を経験しつつ、対仏独立戦争の主体であったFLN（民族解放戦線）が現在も

政権の座にあるアルジェリア。今後この国でどのような歴史が刻まれ、なにがナショナル・シンボルとして残されてゆくのだろうか。

（わたなべ しょうこ/アジア経済研究所 中東研究グループ）

《注》

(1) Paul M. Love, "The Sufis of Sijilmasa: Toward a History of the Midrarids," *The Journal of North African Studies* 15, no.2 (2010): 182-83.

(2) 一九四五年五月八日にアルジェリア東部で起こったフランス当局によるアルジェリア人デモ隊への大弾圧事件と、それに端を発する武力衝突事件。

写真2 独立後の貨幣
(1972年)



トラクターと麦穂、労働と連帯を表す握手
(出所) Numista.com, "1 dinar FAO," <http://fr.numista.com/catalogue/pieces1753.html> (2013年5月23日閲覧)。